

あなたの力になりたい！

くらし

復興

サポート
通信

第5号

2020年10月



ももるんじゃー

平成30年7月豪雨災害により被災された方の生活を支援するあなたのために情報をお届けします

今回のくらし復興サポート通信では、今年度くらし復興サポートセンターが取り組んだ会議や研修の内容を中心にまとめました。発災から2年余りが経過し、時間の経過とともに被災者を取り巻く環境や状況も変化してきています。

特に、住まいの環境が大きく変化する時期でもあり、住まいの再建が進み、地域での生活が進む一方、応急仮設住宅での生

活が長期化するなど、抱える生活課題も個別化、複雑化してきており、多様な専門機関と連携したよりきめ細かな対応が求められています。

また、被災時の居住地外で生活されている方もおられ、県内どこに住んでいても支援を受けることが出来る市町村間の連携体制づくりも重要となっています。



復興を支える 総社市発 新たな形でのつながりへ



総社市西地区にできた建設型仮設住宅(西建設型仮設住宅)の集会所で「O(まる)カフェ」として開催されていた復興サロンは、仮設に入居されていた方の再建に伴う退去などで役割を終えることになりました。

再建され元の地域に戻られた方から「O(まる)カフェがなくなるのはさみしい」「みんなとの時間を大切にしたい」との声があり、もともと下原地区で活動していた「山つつじの会」という地域のふれあいサロン活動に受け入れていただく形でサロン活動を続けることになりました。

活動の場は、下原地区にある下原公会堂です。参加者は約30名。コロナ対策をしながら、「いきいき百歳体操」と茶話会を中心に活動をされています。和気あいあいと体を動かし、楽しめる場となっています。



体操の後は、茶話会へ。おしゃべりや脳トレなど楽しい時間になっています。

<西建設型仮設住宅の状況>

設置戸数:22戸

入居開始日:平成30年9月~

状況:入居者の多くは、下原地区で被災された世帯の方で、退去後は、元の下原地区に再建された方が多い。今秋、全世帯の退去が決まった。

山つつじの会 会長 川田 玲子さんに話を伺いました。

西日本豪雨と大雨によるアルミ工場の爆発被害で下原地区は大きな被害を受けました。被害は大きかったですが、日ごろの避難訓練のおかげで犠牲者は出ませんでした。山つつじの会では、被災直後から地域の活動に取り組んできました。被災後、バラバラになってしまった住民の皆さんに“下原に戻ってほしい”との一心で、お守りづくりやイベントなどを企画し活動を続けてきました。被災後すぐにイベントを開催することへの葛藤もありましたが、住民の方の後押しや手助けもありこの活動をここまで続けることが出来ました。

イベントを開催することで、参加される方が気分転換の場になった、お互いの気持ちを共有出来た、地域のつながりの場になったとみんなに言ってもらえたことがとても嬉しかったです。

災害から2年半が経過し、下原地区の方が入居されていた仮設住宅の全世帯の退去が決まり、下原に多くの方が戻られました。今では、戻られた方と一緒にサロン活動を行っています。

活動も新たに「百歳体操」を始めました。歩いて行ける場所に体操や集まりの場があることがとても大切だと思っています。この場所が、ホッとできる場になるようにこれからも続けていきたいと思っています。



山つつじの会 会長 川田 玲子さん



点を支える面をつくる～地域を基盤とした被災者見守り・相談

恒久住宅移行期の見守り・相談支援における応援・受援体制の構築に向けた対話
～必要な時に声をかけ合い助け合うことができるよう互いを知り合おう

被災者見守り・相談支援事業とは、仮設住宅等に入居する被災者が、それぞれの環境の中で安心した日常生活を営むことができるよう、孤立防止等のための見守り支援や日常生活上の支援や相談を行ったうえで被災者を各専門相談機関へつなぐ等の支援を行うものです。

この事業は、相談員の配置や拠点整備等を行い、被災者の生活再建につながるよう一体的に支援するための体制構築も含まれます。

岡山県では、倉敷市と総社市の2市が事業を実施しています。しかし、把握できている被災世帯だけでも他に13市町に居住しており、他市町では一般施策による支援となります。多様かつ複雑化した生活課題を抱える被災者の支援は、容易ではありません。特に、「住まいの確保」に関する支援は、家族内での再建意向の不一致、保証人の不在、適当な物件不足への対応の他、経済的な支援が必要となることも多くあります。

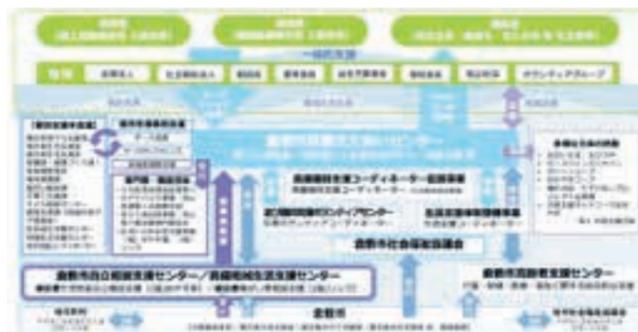
このような状況の中、「被災者が県内どこに住んでも必要な支援を受けることができる」ためには、被災者の多様な生活課題に対応できるよう、県域には市町村域で不

足している社会資源の調整や開発が求められます。

そこで、現在のステージにおける生活課題やニーズに対応できる専門職や民間団体と被災者の現況と課題等を共有し、必要に応じて市町村と士業や職能団体・NPO等が連携できる関係をつくることを目的に、第1回会議を7月3日に開催しました。23組織42名の参加者と、被災者のニーズに基づき必要な社会資源の開発(事業化)に取り組んでいる倉敷市から専門職等との連携の実際について学び、今後の支援について考えました。参加組織は、専門職・アドバイザーとして登録いただき、市町村からの派遣依頼に対応していただきます。この連携が積み重ねられることにより、平時にも支援ネットワークとして機能していくことを期待しています。



令和2年度 被災者見守り・相談支援事業
倉敷市における被災者見守り・相談支援事業の実施体制



会議では、実際の被災世帯の生活課題とニーズを検討し、各専門職の立場から、必要な支援とくらしを豊かにする関わりを考えました。

ボランティアな団体と専門職のアプローチが異なることや状況を多角的に捉える視点など、専門職間や各機関などの相互理解も深まり、多様な組織が連携する意義を実感できました。その後、倉敷市のケース会議への専門職の参加や転居支援における専門職団体やNPOとの連携などにつながっています。

参加組織		
岡山県 保健福祉部 被災者生活支援室	(一社) 岡山県介護支援専門員協会	(一社) お互いさま・まびらぼ
倉敷市 保健福祉局健康福祉部 健康長寿課 被災者見守り支援室	岡山県居住支援協議会	親子支援・災害看護支援 NPO
倉敷市 保健福祉局健康福祉部 玉島保健福祉センター 真備保健福祉課 真備保健推進室	(一社) 岡山県建築士会 (公社) 岡山県社会福祉士会	グリーンコープ生活協同組合おかやま 生活協同組合おかやまコープ
(福) 倉敷市社会福祉協議会	岡山県精神保健福祉士協会	日本赤十字社 岡山県支部
総社市 保健福祉部 被災者寄り添い室	岡山県精神保健福祉センター おかやまこころのケア相談室	(特非) 日本ファイナンシャルプランナーズ協会
(特非) 岡山 NPO センター	(公社) 岡山県宅地建物取引業協会	晴れの国助け合いプロジェクト
岡山キリスト災害支援室	岡山弁護士会	(特非) ピースウィンズ・ジャパン
(一社) 岡山県医療ソーシャルワーカー協会	(特非) おかやま入居支援センター	

多機関協働による総合相談・生活支援体制整備

支援ネットワーク



専門職等との連携

倉敷市真備支え合いセンター委託事業

介護支援専門員による見守り再訪問事業

一般社団法人 岡山県介護支援専門員協会 理事 田中 郁子

平成30年7月 各地に甚大な被害を与えた豪雨災害は倉敷市真備地区にも深い爪痕を残していきました。晴れの国岡山と自負していましたが被災した真備地区の姿を目にしたとき、私の知っている穏やかで美しい田園地帯の姿は全く見たこともない映像が流されていました。

その状況の中で岡山県介護支援専門員協会では保健師と共に真備地区の高齢者世帯の全戸を訪問し、住民の状態確認を行いました。その後、令和元年10月、真備支え合いセンターより再度のケアマネによる見守り事業の協力要請がありました。ニーズの再抽出と今後の訪問活動継続の見極めを行う事、住まいの再建が出来ている高齢者を含む世帯を対象とし、13名のケアマネの協力を得て令和2年3月から訪問活動を開始しました。この地で住み続ける事を選択された被災者の方々の強さに触れながら訪問を重ねる内に、住まいの再建が生きる事の第一目標であった方々が目標を見失い、失ったものの大きさに打ちめられている現状に

向き合うことも多くあります。再建された家は平屋が多く、家族が刻んでいた歴史は記憶の中にしかその姿をとどめない状況の中で襲ってくる喪失感から立ち直れない人々も多く、住まいの再建は出



平成30年7月初回全戸訪問時の写真

来たが生活の再建は想像以上に難しく、支え合いセンターが担っている役割の重さに今更ながら気づかされています。

真備の被災者の多くの方は私たちのアポなし訪問を快く迎えてくださいます。支え合いセンターが、悲しみや苦しみを我が事のように感じ取り伴走してきた結果と考えます。その期待を裏切らないような訪問活動を今後も行いたいと思います。

専門職等との連携

倉敷市真備支え合いセンター委託事業

り災住家長期居住者等へのアドバイス事業

一般社団法人 岡山県建築士会倉敷支部 副会長 中村 陽二(岡山県建築士会 副会長)

底冷えのする今年2月、市からの依頼で訪れた被災家屋を見た瞬間、思わず息をのんだ事を今も鮮明に記憶しています。これまでの1年半あまり、本当に良く耐えて来られたと…。

実は2年前の水害の際、私たちは市役所での被災住宅相談会を行うと同時に、現地での相談対応を開始しました。この時点で既に発災後1～2週間が経過しており、中には被災者自身が復旧の為に床や壁を剥がし始めたりボランティアの方々がポツポツと入って支援作業をする中で、建物の骨格にあたる軸組部分(耐震性能など構造強度上、重要な部材)の一部除去、或いは既に手遅れと思しき事態



も散見され、一刻も早くコミットする必要性を感じていました。

構造部材等の安易な撤去は、安全確保はもとより、以降の復旧工事等において工期、コ

ストに大きく影響するため、一件でも多くの建物に適正な応急対応処置を施す事が重要で、それには建築士以外でも比較的簡単に応急対応できるツールが必須であると認識、そのツールも作成しました。

これでほぼ私たちの仕事は終わったと思っていたところ、冒頭の家屋に出会ったのです。住民の方は、業者に依頼せず自身で修理をしながら生活をしておられました。今、私達が社協の方々と一緒に訪問しているのはこうした方々です。

なぜ、自力で修理しているか、その理由は様々です。業者が多忙で来てくれない、経済的な余裕がないといった切実な事情もあれば、自分で出来る事は自分でと、前向きに愛着ある自宅を直す方もいます。こうした方々に家族の歴史を残すお手伝い(柱の傷も思い出の一つ)として、専門的な立場からリフォーム等のアドバイスをしています。

個人では難しい部分や専門家でない出来ない工事など、必要に応じた説明をしていますが、一方でプライバシーの問題など、まだまだ課題も多いと感じています。



令和2年
7月27日・28日

現任者共通:相談支援技術I研修 ～地域生活支援・コミュニティソーシャルワークの視点から 導き出す 応える とは? 訊く 分ける 気づく ことができるようになるう!

発災から2年が経過し、応急仮設住宅入居戸数・入居者数は、ピーク時の3,415戸・9,074人(平成30年11月末時点)から、倉敷市においては建設型115戸・248人、借上型1,070戸・2,548人(令和2年6月末時点)となっており、住まいの再建が進み、地域でのくらしに移行してきていることがうかがえます。

この移行期は、地域での見守り・安否確認体制の再構築、生活環境の変化による心身の負担への対応も必要となります。一方、応急仮設住宅の供与期間延長決定数は598世帯(令和2年6月末時点)にのぼり、住まいの確保に関わる悩みや不安を抱えている世帯も多く、被災者を取巻く課題も時間の経過とともに個別化・複雑化してきています。同時に、災害をきっかけに、個人・世帯・地域社会で潜在化していた問題や課題が顕在化したり加速化したりしています。

このように、住まいの確保が進み地域でのくらしへの移行期における支援は、広範なニーズへの対応が求められ、①多様な担い手や専門職・機関との連携・協働、②個と地域の一体的支援、③予防的アプローチが支援課題となってきます。ニーズへの対応や課題の解決においては、被災者の現況把握やアセスメントが肝要になるとともに、地域の福祉力を高めていくアプローチも必要となります。

そこで、現任者共通研修は、被災された個人や家族が置かれている状況を個別にアセスメントする力量の強化、とくに生活機能への着目、その人が有する強さ(意欲や能力)をとらえる視点をもつこと、課題を抱える個人に必要なサポート(かかわりのある場やかかわる人々からどのようなサポートを受けているのかなど)の見極めができるようになることを目的として、実施することとしました。

第1回目は井岡さんを講師にお迎えし「地域での生活がより豊かになるために～豊かなくらしの実現を促進するかかわり・支援とは」をテーマに講義・経験共有をしていただきました。

研修プログラム

- はじめに: 波長を合わせる 目線を合わせる
 - ・体と心をあたためる
 - ・初任者共通研修のふりかえり
 - ・研修の目的・目標・進め方・役割を共有する
- 共有: 経験を学び合おう
 - ・キロク(視点) ～かかわりを導き出すために
- 対話: 地域での生活がより豊かになるために
 - ・豊かなくらしの実現を促進するかかわり・支援とは?
 - ～チームアプローチと多機関連携・協働との必要性
 - ・状態像 2020 をソーシャルサポートの視点からみる
 - ～サポート機能と家族・知人友人・地域・公的資源
 - ・何をどうやって訊くか、何をどうやって分けるか?
 - ～状態像 2020 と 聴くこと・訊くこと・つなげること
- おわりに: 学んだことを活かそう
 - ・発見・継続・中止・試行することの整理と共有
 - ・応援メッセージの交換



参加者のふりかえりから

私も地域資源の1つになるということ。改めて地域についていくことの大切さ、意義を感じた。一人ひとり顔が違うように、性格、考え方、強み、弱み、何を再建のゴールとするのか等異なっている。私たちは、その思いや考え方に寄り添い、引き出す関わりが必要。社会資源を活用することによって、地域での生活に戻る、分かっているが、出来ていなかったなと反省。

被災者(世帯)は被災による生活困難もあるが、被災前からの課題が被災によって顕在化した面もある。その課題の解決と災害からの再建との関連がわかりづらかったが、「被災者(世帯)を孤立させないソーシャルサポートネットワーク」の構築につなげることが道であることがわかり納得できた。

被災者の「失ったもの・こと」に着目しがちだったが、本来持っていた「強み」を生かせる取り組み、声かけを心がけたいと思った。確かに「それぞれの人々の持つ強み」を意識して傾聴してみると新たな視点で「被災」をとらえることができたと思う。講義を聞いていたからこそ気づけたこと。

再建とは何をもってそう言えるのか…業務をしながらずっと疑問に思っていたのですが、住環境が整ったから再建、復興とは違うと思います。外側から見ただけではなく、その方が望む暮らしはどんなもので、取り戻せること、再びできることは何か、等深く考えることが必要だと思っています。考えるために情報は重要で、その方がこれまでどんな暮らしをしてきたのかわかることが重要ですが、なかなか面談時に多くを聞くことも難しいです。ただそうした視点を意識しておくことは続けていきたいと思っています。

井岡先生のお話を聴きながら最近の訪問の中で、感じていることを思った。孤独を強く感じている高齢者が増えていることだ。例えば、みなし仮設住宅の人は知らない土地・人々の中で暮らしを、寂しい思いをしている。また家は再建出来たが楽しみ生きがいを持ってここでの再建が出来ていない人。一人暮らしで話す相手もおらず、コロナの問題で地域の集まりもほとんどなく近所の人とも話す機会がない等である。こうしたことから、人とのつながりを求めている人が増えたと感じている。訪問を終えて帰る時、「今日は話が出来て良かった」「聞いてもらえてうれしかった」「また来てほしい」とよく言われる。人とのつながりがないと、認知症になったり、身体的介護が必要になるだろう。つながりが持てる方法を考え、提供していく必要性を強く感じる。

令和2年
7月27日

課題別:事例検討の進め方I研修 ～ケースカンファレンスの改善 導き出す 応える とは? 潜在的ニーズを顕在化させ 見守りの必要性和支援ニーズを見極めよう!

倉敷市(倉敷市真備支え合いセンター)は、被災された方一人一人の状況に応じるために、「個別支援会議(本会議・事前会議)」を設け、関係機関による情報統合を図ったうえで、必要な支援を検討し、民生委員や支援機関等につないでいます。さらに、個別性が高く多機関による支援が必要な方は、「ケース会議」を通じて連携した支援を展開しています。

専門領域の支援につながった方でも、漠然とした不安等に対する傾聴などの関わりが必要な方は、引き続きセンターによる見守り・相談支援活動を行っています。また、専門的支援の必要性は低いが、定期的な見守りや相談支援が必要な方々は、支え合いセンターの訪問を中心としたかかわりを継続しています。現在のこのかかわりを、被災された方が生活を立て直す地域、これからの暮らしを営む地域において、どのように引き継いでいくのが、この移行期における課題のひとつとなっています。

そこで、センター内の会議に位置づいている「ケースカンファレンス」において、この課題を視点として、ケースごとに引継ぎについて検討していくことができるようになることを目的に、井岡さんを講師にお迎えし「ソーシャルサポートネットワークの構築と資源開発」をテーマに講義・演習をしていただきました。

参加者のふりかえりから

その人自身を知ること大切だけど、地域を知ること大切。地域組織だけでなく、地域資源として商店や社会福祉法人等も大切になることも気づけた。違う職種で話すことで色々な発見があることを改めて気づけました。

専門職はその分野の視点でケースを見る。全体が見えてない事も、という話から、普段の計画相談支援とは思考を切り替えて被災者支援の考え方に切り替えられていないことがあったかもしれない。分析マップの考え方、忘れてたなど、フォーマルな支援ばかりに偏ってしまいがちだなと思った。

研修プログラム

- はじめに: 波長を合わせる 目線を合わせる
 - ・問題提起～あるケースの検討過程で気づいたこと
 - 方法: 目的・課題達成のための過程
 - 観点: 目的・課題達成のための論点
 - 参加: 目的・課題達成のための役割
- 講義: 経験を学び合おう
 - ・ソーシャルサポートネットワーク
 - ・会議体の機能整理
 - ・包括的な支援体制の構築
- 演習: ソーシャルサポートネットワークの構築と資源開発
- おわりに: 学んだことを活かそう
 - ・発見・継続・中止・試行することの整理と共有
 - ・応援メッセージの交換



研修講師からのメッセージ / 地域支え合いの実現に向けて ローカリズム・ラボ 代表 井岡 仁志



倉敷市真備支え合いセンターの従事者研修にお招きいただきました。参加者の皆様には、熱心に受講していただいたことに改めて感謝申し上げます。

倉敷市真備支え合いセンターの特徴として興味深いことは、住民から支援者(連絡員)になった方、生活困窮者支援、障害者支援の相談支援専門職、そして社会福祉協議会の職員など、多様な立場の人々がチームで活動していることです。加えて、そのスタッフ総数が約50人体制という大型センターであることも、頻発化、激甚化する豪雨災害の被災者支援における、ひとつの進化の方向性を示していると思います。

多人数、多職種チームとしてのルール作りや、きめ細かな研修体系を設計し、全体としてのスキルの底上げや目線合わせを継続的におこない、また日々の実践上の課題を把握しながら、スーパーバイザーによる助言に加え、支援者同士のピアサポート体制をつくるマネジメントも、この2年間に確立してこられたことを感じました。

被災地の暮らしが少しずつ落ち着きを取り戻してきた今、求められている支援とは、被災者を取り巻く環境(サポート資源の充実)を整え、本人が多様なつながりの中で、人の世話になったり、困ったときに誰かに相談ができたり、また、時に迷惑もかけることもあれば、反対に支える側にもなるような、『支え合いながら生活できる』ようになることを支援することではないでしょうか。

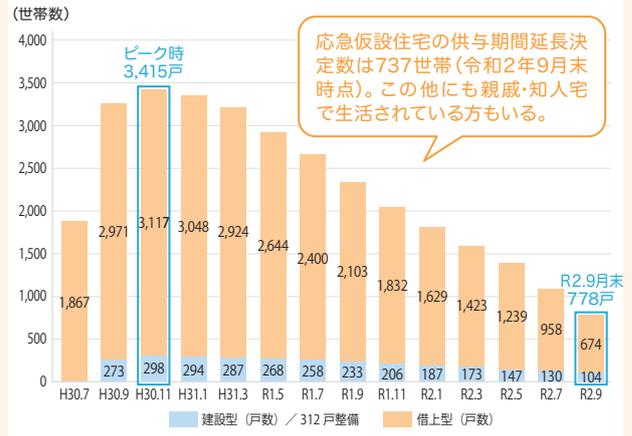
「支え合い」センターという名称の本質的な意味はそこにあり、支える、支えられるという一方通行の関係ではない、相互実現型の支えあいのできる地域づくりの先に真の復興があると思います。



データからみる ～恒久住宅への移行期～

発災から2年3か月が経過し、応急仮設住宅入居戸数は、ピーク時の3,415戸（平成30年11月末時点）から、建設型104戸、借上型674戸の計778戸（令和2年9月末時点）となっており、住まいの確保が進み、地域での生活に移行してきていることがうかがえます。一方、応急仮設住宅に入居せず、親戚・知人宅等で生活されている方、また、応急仮設住宅の供与期間を延長した世帯は737世帯（令和2年9月末時点）にのぼるなど、収入の減少、家族内での再建意向の不一致、保証人の不在、希望物件の不足など、住まいの確保に関わる悩みや不安を抱えている世帯も多くおられ、希望する居住地での生活再建に向け、多様な主体による連携も必要となってきています。

応急仮設住宅の状況（推移）



民間の取り組み 災害支援ネットワークおかやま 晴れの国たすけあいプロジェクト

今回は真備を拠点とする10団体が参画して真備町での暮らしの再建をお手伝いしている『晴れの国たすけあいプロジェクト@真備』、通称『晴れプロ』の活動をご紹介します。

応急仮設住宅を退去して恒久的な住宅へ転居される方には、岡山県の被災者支援メニューとして転居費用を助成する制度（注1）があります。しかし、なかには自費で民間賃貸住宅に入居していたり、親戚知人の家で仮住まいをしており、この制度を受けられない方がいます。『晴れプロ』では、このような制度のスキマで支援を受けられない方に対して引越しのサポートを行っています。

軽トラックやガソリン代等の実費はかかりますが、荷づくりを一緒に行うなど依頼者の声を聴きながら、きめ細やかな対応を心がけています。

コロナ禍で思うような活動が出来ないなかでも、住民の生活再建を遅らせたくないとの思いから、ボランティアの体温測定や、熱中症対策など体調管理に気を付けながら、なるべく住民の要望に柔軟に応えるようにしています。

引越し作業の他にも、納屋、商店、公共スペースなどの住家以外の片付け、みんなの居場所づくり、町のことなど、地域の

課題解決のお手伝いも行っています。お困りごとがあれば、気軽にご相談ください。

また、現在は再建先に戻られた方が地域で安心して生活できるように、倉敷市真備支え合いセンターなどの支援機関・団体との連携を進めています。

一人ひとりの生活再建が進み、多くの人が住み慣れた真備に戻ってきたとき、今まで以上に住みやすい町になる事を願って、『晴れプロ』の活動は今日も続きます。



<お問い合わせ先>
晴れの国たすけあいプロジェクト@真備(晴れプロ)
倉敷市真備町有井94番地 まびシェア内 ☎070-3139-0253



社会福祉法人 岡山県社会福祉協議会

〒700-0807 岡山市北区南方2丁目13-1
県総合福祉・ボランティア・NPO会館(きらめきプラザ)3階
TEL.086-226-2830 FAX.086-225-6602
<https://kurashi.fukushiokayama.or.jp/>

岡山県暮らし復興サポートセンターの事業は岡山県から「被災者見守り相談支援に係わる市町村支援業務」の委託を受けて実施しています。

発行人/岡山県暮らし復興サポートセンター
発行日/2020年10月30日

編集後記

肌寒く感じる日が多くなってきました。私は、毎年寒くなってくると編み物がやりたくなります。寒くなる日が続くと、そそくさと毛糸を引っ張り出し、ココアを用意して何を作るのかと考えるのです。編み物を始めると、冬になったなあと感じます。暖かい部屋で毛糸をいじり、無心に編むことがこの時季の私のストレス解消法かもしれません。以前はセーターなど大物に挑戦しては挫折を繰り返し、今では1日で完成するような小物を編んで楽しんでいます。Y